



リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - 3 - 1



「第1章 ・ ナツキ」
～ 「墓無き者」の物語 ～

(発掘作業中)

霧樹里守 is 土岐真扉

『 (仮題) 流浪の民 ・ 構成・設定Memo 』 (@中学2年～高校3年...だと思
う☆)

『 (仮題) 流浪の民 ・ 構成・設定Memo 』 (@中学2年～高校3年...だと思

う☆)
2006年10月13日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\) コメント \(1\)](#)

第1章 ナツキ

第2章 ティシール

第3章 律子

第4章 緑の炎

or

第1章 ティシール

第2章 逃亡

◎ 全体のテーマ； ~~無感動な氷の子・鋭が~~
~~皮肉っぽい“コンピューター”に~~
~~成長するまでの過程~~

~~6月・ナツキ、《センター》へ。鋭 (10歳) に会う。~~

~~8月・鋭、外出日に正明に出会う。~~

~~――・ナツキ、鋭の記憶力を知りショックを受ける。~~

~~――・姫小路と同衾のところを鋭に見られる。~~

~~9月・鋭、ナツキに教えられてティシールに会う。~~

~~――・スインセティッタ・コンピュータ完成。~~

~~――~~

~~(オムニバスにするか、長編にするか?)~~

ナツキ

リツコ

鋭

ティシール

燎野

森の少女

アイン・ヌウマ

朝日ヶ森

旭学園

緑衣隊

《センター》

国立科学者養成センター

聖光愛育院長

第1章 起承転結

- ・ ナツキと鋭の出会い 邂逅
- ・ ののみやなつき。 展開
- ・ なつき、鋭をにくむ。 破局
- ・ 終焉 終焉

「第1章・ナツキ」
～ 「墓無き者」 の物語 ～

2006年10月14日 連載（2周目・最終戦争伝説）

「——《センター》へ行くわ。手続きをしなさい、北沢」
報告書の最後の行に目を通し、既処理のマークを押しながら云う。

「視察ですか、何日ほど」

「引っ越しよ。当分むこうに居つくわ。出発は明後日。」

「承知しました」

北沢は軽く一肯してすぐに出て行く。身長190cm近い、痩身の、有能な男。

「.....なにか不服でも?! 遠野!」

うっそりと部屋の隅からこちらを見ているのは、いつもこの男の方だ。

「.....別に。」 低い声でぼそりと答える。

「だったら、早く行って、あたくしの荷物をまとめなさい!」

あたくし、野々宮奈津城（ののみや・なつき）。表向きは旧華族・野々宮家の唯一の嫡子という
ことになっている。表向きは。

精子銀行というのは知っているわねでしょうね。そう、米国の、ノーベル賞科学者とIQの高い
女性とを人工的にかけあわせて、優れた資質を持つ子供を得ようという実験機関。

あたくしも、それに似た団体によって造られた。純国産で——つけ加えて云うなら人工子宮成功
例の第1号。生粋の、試験管ベビー。

この事は物心つく以前から知っていたように思う。

なにせよチューブの中で、まだ大脳が形成されるか否かという時期からはじめられたあたく
しの早期全人教育

「う、うっわ～～お。おわお!」

おれ、あくびしてやる。めいっばい思いっきり。い～い気分。

なんつったって休日だもんな。もろ、ひと月ぶりの。なんにもない日。

× × ×

朝おきて顔を洗ってマラソンして朝ご飯を食べて歯をみがきました。

—(あ、おれ正明ってんだ。よろしく)—

で、いつもならこの後「訓練開始!!」つつうがなり声が響く。……はずなんだけど今日は休暇なんだよな。さて、何するベエ。おとなしく基地ンなか探検したってもいいんだが、きのうの今日なんで、やめた。

やっぱ外を見てこよう。

てんで外出許可証とりに廊下へ出る。

うえ、いつも思ってたけどこーやってちんたら歩いてみると……ひで一所だね、ここは。上から下まですべからくこれ人造！ もろ直角と直線と——おまけにブルーグレーと銀色ばっかだぜ、見てるだけで寒い。

と、角をまがった所で人間が2人。

「お、おたくも外出？」

ガキの方——細っこいんだぜ、これが——来るとき車でいっしょだった奴。

「燎野（りょうの）さん。」

心もち首かしげてこっち見上げる。

「わお。覚えててくれたわけ、感激」

……すこ～～し、苦笑？ ホント表情のとぼしいやっちゃ。

「……そりゃ、覚えますよ。一度聞けば」

おれ忘れたぜ——、おたくの名前。

「清峰くん。そちらは？」

神経質なんだが気が弱いんだか、のぞいただけで目、まわりそうな眼鏡かけた男。まだ若いな～～清峰——あ、鋭——ったっけ？ のオブザーバーらしい。

「あ、おれ……」

「燎野正明さんです、西谷助手。多分宇宙飛行士（アストロノウツ）訓練生——なんだと思いますけど。正明さん？」

「あ？ うん。おたくは？ やっぱ高知能児なわけ？」

「——ええ。」

「清峰くん。」

西谷・青白きインテリ氏がかたい声をだす。

おーおー、わーってるよ。《センター》の独立研究助手としちゃ、大事な大事なモルモットちゃんにはあまり雑菌を近づけたくないわけ。

「じゃな。」

まだ話したい気もしたけど——ひょいと片手上げて別れる。

「ありゃ、何してんだよ、おたく」

左翼の実務室で外出許可と通行証を手に入れて、戻ってきてみるとボーヤがまだいた。この間約30分。ひとり、だ。

「……西谷助手が……」

少し困ったみたく笑う。

ここ、今いるところは、おれが放りこまれた《教育・能力開発法実験研究棟》で、
エ長々しい名前の建物の、一階中央。廊下がちょい広がってエントランスになってる
、棟の出入口にすぐtの場所だ。ブルーグレーとシルバー一面のすみっこに、

× × ×

「ありゃ、何やってんだよおたく」

左翼の実務管理室で外出許可証と正門（ゲート）の通行証を手に入れて、鼻唄まじりに正明が戻ってきてもとみると鋭がまだいた。西谷助手とやらはどうしたものか、ひとりつくねんと壁ぎわのイスに腰かけている。

2006年10月25日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

○ 邂 逅

《センター》というのは、正確には国立科学者養成学校 (J.S.E.S.) のみを限定して指す言葉ではない。同じく国立の、広大な敷地と予算・人員とを持った科学・技術開発研究所——科技研——全体をもひっくるめて云うのである。正しくは、《センター》の中に2つのセクションがあって、それが実験室の集合体である“科技研”とその将来をになうエリート研究員の養成所たるJ.S.E.S.である——と説明する方が速い。

したがって科学者の卵たちの授業の何割かは実際の研究の一端を担う——といった形の実地演習として行なわれ、また既に《センター》の研究員として働いている者が、時間をやりくりして専攻以外のジャンルを習得しようとするのもさして珍しい事柄ではなかった。そういった手合いも含めて、J.S.E.S.には現在10歳前後から30代半ばまで、約200人近い学生がいる。彼らは主として理数系統の学問——地学・天文学・宇宙工学・量子物理学等のビッグ・サイエンスから医学・薬学・生体工学・ソフトウェア・ハードウェアに至るまで——をそれぞれの適性・指向に合わせて選択し、徹底的な専門・集中教育をほどこされるのだ。

いくらかは人文科学・社会科学系統を志す人間もいるのだが、これも最終的にはデスクワーク中心の専門バカになってしまうという点で大同小異だった。特にこの分野では、《センター》は有機的組織の編成・管理法に関して、目覚ましい成果をあげ得ていた。

「…… 《センター》へ行くわ。手続きしなさい、北沢」

報告書の最後の1行に目を通し、既処理のマークを捺 (お) しながら云う。

「視察ですか、何日ほど」

「引っ越しよ。当分むこうに居つくわ。出発は明後日。」

「承知しました。」

北沢は軽く一肯してすぐに出て行く。慎重190cm近い、瘦身の、非常で有能な男。奈津城 (ナツキ) への忠誠心に少し欠けるとさえ思える、だからこそ信頼のおける、筋金入りの武人。

「——なにか不服でも!? 遠野!」

うっそりと部屋のすみからこちらを見ているのは、いつもこの男の方だ。

「……別に。」 低い声でぼそりと答える。例によって百万言も不平をためこんでいるのは目に見えているというのに。

「だったら早く行って あたくしの荷物をまとめなさい!」

ダン!! ぶ厚い書類の束を机の上でそろえて、ひきだしに放りこむ。

「わかりました」

いんぎん無礼きわまりない大時代的な辞儀。それから無愛想に背をむけて、皮肉にゆったりした足どりで歩き、扉をあける。

「お待ち。」

イライラと爪を噛みながらにらみつけ、よっぽど怒鳴りつけてやろうかとも考える。それからひと呼吸おいて気を鎮めて、

「これはもう下げていいわ」

傍らの盆を指さす。

遠野はかすかに微笑したようだった。比較的小柄で横幅のがっしりした、山男めいた印象を与える彼である。素早く歩み戻って来て飲みさしの茶器を取りあげた。

「ナツキさま。」

他には何も云わず、ただそう呼びかけただけで男は一礼して部屋を出て行った。

「……まったく。妙な男!!」

奈津城と呼ばれた彼女はまた新たな書類の束を取り出すと、判や文献などを片手に手速く処理を始めた。

野々宮奈津喜——実はまだ13歳のほんの少女である。没落の一途をたどる旧華族・野々宮家の、戸籍上の唯一正当なる嫡子。

そして、《センター》にゆかりの子供だった。

精子銀行、というものをご存知だろうか。1900年代も後半になってU.S.A.にて設立され、ノーベル賞科学者の精子と遺伝的に優秀な女性の卵子の人工的なかけあわせ実験を行う、一種非人道的でもある研究機関のことである。

《センター》でもそれに相前後して、純国産で極秘裡に同種の実験が行なわれていた。

そう、野々宮姓を名乗るこの驕慢な少女は、その生きた実験結果であり、数少ない成功例の一人だった。消えゆきつつある旧家の当主・野々宮子爵は、借金のカタに実の妻の生殖機能を売却したのである。世間体のために書類でだけ実の子としてナツキを扱いながら。

野々宮奈津城を成功例であると書いたが、実際にはそれが成功であるのか、失敗であるのか、判定が難かしいところだった。IQで云えばその異常なほどの高さは確かに成功と言えた。が、優れた後継者、より有能な科学者の出現を期待した当初の実験目的からすれば、《センター》としてはナツキを全くの失敗作と断定せざるを得なかったのである。

おそらくは卵細胞からの影響をより多く受けてしまったのだろう。

奈津城は、小児期から今日に至るまで、自然科学的なものに対しては一切の興味も適性も示そうとしなかった。彼女が激しい魅力を見いだすのは芸術作品に対してであり、哲学や思想・複雑に入り組んだ政治状況などにであった。その生まれつきの自負心は己れを意に染まぬ方向へ誘導しようとする環境に、あえて順おうとはさせないようだった。

以上のような推移から9歳の冬にこの早熟な少女は戸籍上の実家へ帰されたのである——莫大な養育金つきで。

そして無能な義理の父から家政の権限を奪いとるや、世間一般からは注意深く自分の姿を隠したまま、傾むき切った野々宮の財政を奈津城はたちまちにして建て直してしまった。

更に4年。

少女は次第に大きな力を身につけつつあり、それにつれ、何か莫とした野望めいたもの、大胆な計画が、心の奥底で形を成し始めているのが彼女自身にもはっきりと解るのだった。

「……ふん。」

自ら指定した、出発の日の朝である。北沢も遠野も昨夜のうちには全ての手配をおえていて、あとは主人が出掛ける気になりさえすればいつでも出られる状態。待機時間である。

それでもゆったりと優美な細い肢体をソファに埋もれさせて、奈津城は遅れて届いた最後の書類に目を通していた。——これより後のものは直接《センター》あて転送されるよう、手筈はついているはずだ。

片手に紅茶のカップ。

「この前打った手はどうも無駄になってしまったようね、K物産の株は上昇一方。野々宮K.K.系列のかなりのダメージはこの分だとふせぎ切れないでしょう。——北沢！」

「は。」

「後で古物商の大井戸に電話を入れて、3日以内に例のものの買い付けを始めるよう云っという頂戴。……いつまでも杉谷の好きにさせときゃしないわ。」

最後の部分は独言で、少女はつぶやきながらペロリと血の色の唇をなめる。対象的に色の薄い淡桃色の舌が、未だ子供の体型から抜け切っていない美少女の顔に、奇妙に妖艶な表情を与える。双眼が光をはじいてきゅっと細められる。

狩るべき獲物を与えられた時の、野性の猫族の微笑み。

「出掛けるわ。遠野、上着を」

目的地までは専用のジェットで3時間ほどだ。

2006年10月26日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\) コメント \(1\)](#)

× × ×

《センター》の広大な敷地内の西半部中央、J.S.E.S.系の建物の集中しているエリアのひとつ。周囲のものよりも比較的小規模な“教育・訓練法開発棟”の一角に、ひとまず奈津城の個室はしつらえられていた。

8077のNo.のある、白亜の建物の最上階・4階である。

一旦、用意された部屋をのぞいた後、準備を整えた係員に2・3の指示を与えて再び奈津城は階下へおりた。

No.8077棟1階。エントランスからは少し離れたロビー部分の奥、一段高まったところにちょっとした自給カフェテラスが仕切っている。

完全な自販制で色気もそっけもない。とは云え《センター》内では特権階級ともいえる独立研究者（ドクター）と独立研究助手（インターン）・制度的にははるか下位だがいざという時には実指揮権を握る警備要員・緑衣隊の士官クラス、そういったエリート専用のエリアである。調度や設備には相応の金がかかっている。

品も上等で種類も多い。

奈津城はためらわずにそこへ入って行った。

別に茶を啜みたいというのなら自分の部屋で仕度させれば良い。それだけの設備や物はそろっていた。ただ、奈津城は自室へ慣れない人間が入っているのは好まないのだ。部屋の中を手直しさせておくために人手が必要とあれば、自分が出て行く。

そしてカフェへ出向いたのにはもうひとつ別の目的があった。

デモンストレーションである。

奈津城の後には、数歩はなれて、それが本来の彼らのコスチュームである緑の隊服をつけた北沢と遠野がノーマル装備で従がっている。北沢の胸には上級指揮官の徽章。——日ごろ奈津城の命令で私服をつけるように言われてはいるが、彼らも緑衣隊員であり、《センター》内や緑衣隊司令部その他におもむく折には制服に戻る。

彼らは護衛兼側近参謀としての任に着くようにと奈津城のもとへ派遣されているが、主人の行動と緑衣隊との利害関係いかんによってはためらいなくこの少女を撃殺する可能性もあるのである。

今は上部からの命令は“野々宮に従え”であったが——……

そんな部下2人を従えて13歳の少女はカフェテリアへ足を踏み入れた。

結構広い部屋の中にざわっとざわめきがおこる。

デモンストレーション。さっきも云ったようにこのカフェはエリート専用のエリアである。エリート候補たるJ.S.E.S.の教育・訓練生たちもまた別の理由から立ち入りを禁止されている。——彼らは徹底的な生活管理の一端として摂取栄養量を規制されているので。

奈津城は落ちついて中央やや奥まった席に腰を降ろし、（人間の本能としてこういう場所では壁際から埋まってゆくのが常である。——この時、人の入りは4分くらいのものであった。）北沢にブランディティー・ロワイヤルをとりにやらせた。

幸い座っている連中の大半はまだ若い独立研究助手（インターン）と、彼らに従がって特権階級のエリアに立ち入っている平研究員ばかり。ここには緑衣隊員も歩哨に立たない。

1～2分のうちに、若い——といってもJ.S.E.S.からたたきあげて10年このかたは《センター》に住んでいる連中の間に、5年前実家に戻されたあの天才少女の記憶がよみがえってきた。

帰ってきたのか?!

まさか。科学分野への関心値のあの低さを覚えてるだろう。

第一、J.S.E.S.への復帰なら、あんなに堂々としてここへ入ってこられる筈がない——……

様々な推測、個々の思惑がそちこちのテーブルの間でとり交される。

奈津城は頃合いを見はからって北沢に用を言いつけて一旦退出させ、遠野に紅茶のおかわりと軽食をとりにやらせた。

暫時、少女はまるで無防備な存在になる。

「やア、ナツキちゃん——いや、もう奈津城サンとお呼びすべきかナア。ズイ分大きくなりましたネエ。」

予測通り、席をたって話しかけに来る者がある。奈津城は上品に首をまわして声の主を見る。見るからに軽薄そうなこすっからい様子をした男——しかしこの男の、本人もいかに無心げに見せかけようかと苦心している笑い顔にだまされてはいけない。

「……まあ。イチガネさん、でしたわね。お久しぶりです。お元気そうでなによりですわ。——いかがお過ごしですか?」

確かに少し早熟気味であり、異常なほどの聡明さをそなえてはいるが。そこにいるように思われるのは上品で育ちの良い、どこから見ても純真無垢な幼ない美少女の見本である。小王女像、と云っても良いだろう。しかしかつてのJ.S.E.S.生活中、世間なみに考えれば学齢に達したかどうか——という奈津城の将来性を早くもねたんでこの壺金という男がどんな陰惨な手口で彼女を潰そうとしたか、都合よく忘れてしまっているほどのお人好しだなどと思われては困る。どころか、何年何月何日の何時何分にどこでどんなチャチな悪事を働いたか、どういう汚い手口で前任の研究助手を陥れて今の地位を手にしたか。この男の動静くらい尋ねるまでもなく、少女は全てを把握しているのである。

いいですかネ、など見かけは丁寧に尋ねながら、返事を待つまでもなく壺金は奈津城の正面に陣どった。しきりにしゃべりまくるのはこのテの男には共通の態度だろう。存在感の薄さ、中味の頼りなさを、騒音によって補なおうとでも云うのだろうか。

戻って来た遠野からトレイを受けとりながら、にこやかに、あでやかに、奈津城は壺金にむけて頬笑みかけた。この男がうまくこの場に居あわせたこと、最初に声をかけて来たのがこの男

であったことに対して神に感謝でもしてやりたいような気分になっている——彼女は無神論者だが。

「……そんなワケで、まァ長年コツコツと地道にやっていたのがむくわれましてネ、独立研究者（せんせい）のおかげサマで今ではいっぱし、独立研究助手（インターン）として大きなカオをさしていただいでる、とこんなワケなんですヨ。」

実に残念そうに壱金は長広舌にピリオドを打った。

「まあ、すばらしいですわ。出世なさいましたのね」と奈津城。

「いや、なに……」男のニキビだらけの鼻がピクピク動めき、途端、奈津城は口の中の食物を飲み下すのが困難になった。

あわててハンカチで口をおさえ、瞬間的な吐き気をこらえる。

「おや、どうか。顔色が青いようですヨ。」

「……なんでもありませんわ。慣れない飛行機で着いたばかりなものですから」

主人のもくろみや内心を知ってか知らずにか、慄然とした表情のまま遠野は待機の姿勢を崩さなかった。

「——ところで、あなたはここで何を？」

壱金がようやく本題に入ろうとする。

((、しらじらしい))

奈津城は人畜無害な愛らしい微笑を浮かべたまま内心苦々しく毒づいた。

通常、ある存在の動静に関して もっとも詳しい情報を握っているのは それに敵対する者であると云われている。

《センター》屈指の有力者でありJ.S.E.S.関連プロジェクトの主要推進力でもある……

(未完)

「次は無慈悲な夜の女王様」... (2016年3月26日)

[「次は無慈悲な夜の女王様」... \(違っ](#)

2016年3月26日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)

A I の名前が "N A - T S U - K I" だったとしても驚きませんが、なにか？

...w (^□^ ;) w...

...ちょっと待て...|||| (@@ ;) ||||...

「なかのひと」、

「ティー」なわけ～...ッ???!!!

参照：<http://76519.diarynote.jp/200610170409500000/>

『 ティシール (仮題) 第1部 ティシール (第2部・律子) 』 (@中学2年～高校3年の
どこか☆)

...というハナシに落ちて、けっきょくリステラスぐるぐる紋様に戻る...☆

w (^◆^ ;) w

リステラス星圏史略
古資料ファイル
3-3-1
「第1章・ナツキ」
～ 「墓無き者」の物語 ～

<http://p.booklog.jp/book/109773>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109773>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109773>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ